

● ビブリオテーカー ●

BIBLIOTHECA

Nihon University Mishima Campus

日本大学国際関係学部・短期大学部（三島校舎）

No. 21
2026.2



新図書館の開館に当たって

図書館事務課長 吉田 雅哉

三島キャンパスにおける長年の希望であった新図書館が正門付近に完成し、いよいよ開館を迎えます。

新図書館は、耐震性を備えた地上3階建て、館内には交流の場としてのラーニングcommons、グループワークエリアなどの施設があります。これらの施設は周囲の迷惑となる会話は慎むアクティブ・ゾーン、小声での会話に留めるクワイエット・ゾーン、私語を慎むサイレント・ゾーンにゾーニング(区分け)され、利用者が求める滞在場所を自由に選択できるようになっています。また、多くの学生さんに利用いただけるよう、

開館時間(平日)は、今まで20時だったものを21時に延長しました。

多様な学修スタイルに応じ、時代に即した学修や研究を行うことができるよう、従来の閲覧席のほかにカウンター席、ソファ席、可動式テーブル席等を用意しました。

三島キャンパスの新しいシンボルとして、学生生活がより充実するよう新図書館を積極的に活用いただき、単なる本を見る場所ではなく、「自主的な学び」「自由な交流」を創出する場としてください。



▲ ラーニングcommons(1階) (左:配架前,右:配架後)



▲ グループワークエリア3(2階)



▲ ブラウジングエリア1(1階)



▲ ブックタワー



▲ 閲覧スペース3(2階)

新図書館利用案内

開館時間	月～金 9:00～21:00 / 土 9:00～17:00 ※夏季休暇期間中等の長期休暇期間中は、開館時間が変更になることがあります。
休館日	日曜日、祝日(授業実施日は除く)、本学創立記念日(10月4日)、夏季・冬季休暇期間中の一定期間、蔵書点検作業期間等
入・退館	学生証バーコードをゲートにかざすことで、入・退館ができます。
貸出	自動貸出機で可能 ※貸出できない資料もありますのでご注意ください。
返却	図書館内自動返却機又は15号館1階及び三島駅北口校舎1階の「返却ブックポスト」で返却できます。 ※図書館利用に関する詳細は、「図書館利用ガイド」を参照してください。

図書館の思い出

国際教養学科 教授 芳賀 理彦

幼い頃から図書館が好きでした。私が生まれ育った町には、現在指定文化財として保護されている洋風建築の古い建物があり、昔、町の図書館として使われていました。幼少期にそこに通った記憶がまだに残っています。ひんやりとした荘厳な雰囲気と細長い洋風の窓から差し込む淡い光が、大げさですが、まるでヨーロッパにあるどこかの街に入り込んだような錯覚を子供心に与えてくれました。そこで本を読んだり借りたりすることは、私にとって非日常感を味わうことのできる体験でした。

小学生の頃には、もちろん学校の図書室を頻繁に利用することになります。当時よく借りて読んでいたのは、「シャーロック・ホームズ」や「アルセーヌ・ルパン」などのミステリー作品でした。同じ話を飽きることなく何度も繰り返し読んでいました。「マガーク少年探偵団」という児童文学作品のシリーズは当時人気が高く、みんなこぞって読んでいたのを覚えています。

中学生、高校生になると、趣味の範囲が広がったこと、書籍を自分で収集する喜びを覚えてしまい、図書館というよりは町の書店がもっぱら放課後の時間を潰す場所でした。町に3軒あった書店を毎日順番に巡り、単行本や文庫本、雑誌などを立ち読みしたり、少ない小遣いの中から散々吟味して、これはと思うものを購入したりするのが楽しみとなりました。その時に偶然巡り会った、池澤夏樹さんの『スティル・ライフ』という小説が、現在の私の専門分野である「文学」を決定した理由であり、ある種人生が変わったきっかけなのかもしれません。

大学に進学し、図書館は、授業で必要な資料を探し、勉強をする場となりました。卒業論文や修士論文執筆の際には、文献を探して

他大学の図書館を訪ねることもありました。研究者としての第一歩をその踏み出していたのだと、今となっては懐かしく感じます。

博士課程の大学院生として、ニューヨーク州立ストーニーブルック大学に留学していた頃は、ほぼ一日中大学の図書館にいました。というのも単にその図書館を利用するだけでなく、私の所属していた比較文学科の学部自体が、その図書館の建物の中に含まれていたからです。先生方の研究室も自分の研究室もその建物の中にあり、多くの授業もその建物内で行われていました。

アメリカの大学ではよくあることなのでしょうが、その図書館は夜中の12時まで開いていて、特に試験期間中には、学生があちらこちらで夜遅くまで勉強していました。一階のホールには様々なフレーバーのコーヒータンブラが売られているスタンドがあり、そこで一息入れたり、キャンパス内のカフェテリアで食事をとったりした後はまた図書館に戻り、みんな熱心に勉強していました。勉強は大変でしたが、とても充実した時間でした。

3年前に日本大学国際関係学部へ赴任した際に、最初に図書館を訪ねてみました。1955年に建設されたその図書館は、私がこれまで通ったことのあるいくつかの古い図書館と同じく、威厳がありました。そしてなぜか懐かしさを感じました。この図書館がもう使われなくなってしまうのは寂しいことではありますが、2026年からは新しい図書館が開館します。私にとっても人生で何回目かの図書館との出会いになり、楽しみにしているところです。この図書館が学生のみなさんにとっても、学びの空間であると同時に自分を発見できる場となることを願っています。そしていずれは、そこで過ごした時間がみなさんの貴重な大学生生活の良い思い出のひとつとなることを願っています。

図書館賛歌

ビジネス教養学科 教授 永田 美江子

図書館賛歌と書いてしまうと、先のパリオリンピックでセレーヌ・ディオンがエッフェル塔から熱唱したシャンソンの名曲「愛の賛歌」を彷彿させてしまうかもしれません。「愛の賛歌」の冒頭、「あなたの燃える手で私を抱きしめて、只二人だけで生きていきたいの」とあるように、本を読んでいる時間は、私とあなた(本)の世界です。そして、図書館の中でのあなた(本)との時間は、だれにも邪魔されることのない幸せな時間です。二人の時間を邪魔されることもなければ、そのときの気分によって自由に本を読むことができる空間、図書館は自分がどんな者にもなれる魔法の場所です。

図書館に行って本をめくれば、時空の中で過去に没頭する歴史学者も、現在までつながる社会、経済、法律の研究者から、冒険小説の主人公、ロマンス作品の完全無欠なヒーローや、そのヒーローが焦がれるヒロインにも、本とおして、古今東西のありとあらゆる英知や物語に触れることができます。先ほどのセレーヌ・ディオンが歌った曲のオリジナル、「愛の賛歌」のエディット・ピアフのまるで物語のような彼女の人生さえ、その伝記を読むことによって追体験ができます。

図書館はもうひとり、いや、二人三人と自分が現実の世界ではかなわなかった経験を疑似体験できる、世にもまれな空間です。紙を発明してくれた中国後漢の時代の蔡倫や、15世紀に活版印刷をはじめたドイツのグーテンベルクには感謝しかありません(西には足をむけて眠れません)。そこはインターネットのバーチャルな世界よりも、もっと広く鮮やかな世界が繰り広げられていると思います。なんと言っても想像は、インターネットが提供してくれるわかりやすい世界をはるかに凌駕し、その空想世界はだれにとがめられることもなく、思いのままの世界に漂うのですから…。

本による元祖異次元バーチャル体験をするか、しないかは、それぞれの価値観といってしまうかもしれませんが、読書によるわくわく感覚を知らずに過ごすのは、あまりにももったいない!と言いたいです。

うれしいことに、三島キャンパスの図書館も新しく再始動します。図書館に入るだけで、楽しいなかを味わわせてくれるような明るい外観の建物。どんなあらたなドキドキ体験ができるのか、それは利用した人にしかわからない、とっておきの宝物ではないでしょうか。

● FACULTY PUBLICATIONS

本学部教員の刊行物紹介



基本から学ぶ 発達と教育の心理学

有木 永子・伊坂 裕子 ほか著 藤田 圭一 編著 [福村出版]

本書は、教職課程で子どもの発達と教育を学ぶ大学生に向けて書かれたテキストです。専門的な内容を扱う心理学の学習では、用語が難しく、なじみにくいと感じる学生も少なくありません。そこで本書では、「学生が理解しやすく、読み進めやすいこと」を大切にしながら執筆が進められました。初めて心理学の偉人や理論に触れる学生が、少しでも親しみを持てるようにとの思いから、多くの写真や図表が盛り込まれています。視覚的にも理解しやすく、学びを楽しみながら心理学の基礎を身につけられる一冊です。

執筆者には日本大学ゆかりの先生方が多く、国際関係学部からは伊坂裕子先生が第11章「教育測定と教育評価を学ぶ」を、有木が第5章「発達(思春期～青年期)を学ぶ」を担当しています。

子どもと関わるすべての職種の方々や、子育て中の保護者の方にも役立つ内容です。ぜひ、教育や発達への理解を深める一冊としてお手にとってみてください。



ファミリービジネス成功の秘訣

水谷 公彦 ほか著 [中央経済社]

日本企業は約340万社ありますが、減少が続いています。日本企業の約97%がファミリービジネスと言われており、日本経済や産業にとって、ファミリービジネスの存続・成長は大きな課題になっています。本書は、このような状況を踏まえ、ファミリービジネスが存続・成長するために、ファミリービジネス経営者は何を意識し、時代の変化に対応して次世代に事業をどのように承継させていくかにつき解説しています。

第I部では、幅広い観点に答えられるよう、ファミリーガバナンスに関する理論面からのアプローチと、事業運営や相続の時に直面する実務面からの論点整理を行っています。そして、第II部では8つのファミリービジネス事例を取り上げ、その存続・成長のために事業環境の変化や事業承継に際してどのような対策を講じたかを明らかにすることで、本書を手にしたファミリービジネス経営者が自らの事業や承継を具体的に見直すことができるようにしています。

本書が日本のファミリービジネスの存続・成長に少しでも寄与し、日本経済や産業の発展につながることができれば幸いです。(2025年度ファミリービジネス学会奨励賞受賞)

乾岔子島事件史
一九三七年の日ソ紛争

笠原 孝太 著 [錦正社]

本書は、1937年に満洲国とソ連の国境地帯で勃発した乾岔子(カンチャーズ)島事件についてまとめた研究書である。乾岔子島事件は、1930年代の満ソ国境における最初の大規模紛争でありながら、従来注目されることがなく、研究が停滞していた。本書はこうした状況を打破することを目的に執筆したものである。

本書では主に5つの課題を設定し各章で検討している。第1に、乾岔子島を中心とする紛争地域の地誌と満ソの国境線認識である。第2に、乾岔子島事件の前史である。1934年9月成立の「満ソ水路協定」の締結と破棄までの経緯に注目し、軍事衝突に至るまでの国境河川をめぐる対立の歴史を検討した。第3に、乾岔子島事件の勃発から終結までの詳細な経緯である。手つかずであった関東軍司令部、第一線部隊、参謀本部の動きを時系列で組み立てる作業を行った。第4に、外交交渉についてである。日ソの資料から交渉内容を明らかにした。第5に、ノモンハン事件への影響である。乾岔子島事件の実態を明らかにすることで、2つの紛争の接点を見出す作業が可能になった。

本書では、これらの課題の検討を通じて「乾岔子島事件史」の確立を試みている。

現代演劇 Vol.23
特集 トニー賞・ピューリツァー賞Ⅱ

松本 美千代 ほか著 [金星堂]

本号は、前号に続く第2弾として、2000年以降のアメリカ演劇に焦点を当て、トニー賞やピューリツァー賞を受賞、あるいは候補となった主要作品を多角的に検討する特集号である。『イン・ザ・ハイツ』『ブック・オブ・モルモン』『オスロ』『ハDESTAタウン』『ムーラン・ルージュ』『オクラホマ!』などの受賞作には、黒人をはじめとする多様な人種や民族、ジェンダー、格差、宗教、障害、環境、中東系やヒスパニックの台頭、白人家庭の衰退といった現代的テーマが反映されている。

スーザン・ロリ＝パークス『父、戦地から帰る』は、黒人奴隷解放後の自由と再生の表象を問い、アリソン・ベクダル原作『ファン・ホーム』は個人的な家族史を通してセクシュアリティの理解を促す。リン・ノッテージ『スウェット』は「ラストベルト」での白人労働者の危機感を突きつけ、『ハミルトン』は建国神話をヒップホップと多民族キャストで語り直すことで、アメリカの「記憶」を新たに描き出す。これらの作品は、社会的現実と舞台表現が交錯する現代演劇の新たな地平を示す。本書は演劇を通して変化するアメリカの姿を可視化する意欲的な特集号となっている。

所蔵資料紹介

幕末における日本語「号令詞」の創製

国際総合政策学科 教授 浅川 道夫

今日の学校教育では、集団動作を指示するにあたって「号令」が身近に使われているが、これらは幕末に導入された西洋式の調練(軍事教練)を通じて創製され、明治以降に広まったものである。近世以前の日本では集団動作を示す「下知言葉」がほとんど使われていなかったため、オランダの教練書を翻訳する過程で「号令詞」を日本語化するという試みがなされ、安政年間(1850年代後半)にその原型が確立された。ここでは本学部図書館の駿河文庫に収蔵されている和本の中から、これに関連するものを紹介したい。

幕末の日本に西洋式砲術や銃陣を導入した高島秋帆は、長崎でオランダ人から教授を受けた際の「西洋流ヲ修行ナスモノニハ必西洋辞ニテ銃陣ヲ伝フヘシ」(岩崎鐵志「八木剛助筆記『田原記聞』」『実学史研究Ⅱ』思文閣、1985年)との取り決めに従って、片仮名蘭語の号令を用いていた。ペリー来航後の安政3(1856)年に講武所が設立されると、砲術師範役となった下曾根金三郎は、1832年版オランダ歩兵教練書を牧天穆が翻訳した『和蘭官軍 歩操軌範』(山城屋佐兵衛、1855年)にもとづく調練を行った。原書は*Reglement op de exercitien en manoeuvres van de infanterie* (Amsterdam : Gebroeders van Cleef, 1832)であり、以下のような号令の訳語を提示した。ただしこの邦訳「号令詞」は、語調が間延びしていて兵式号令に適せず、調練の現場では高島秋帆以来の片仮名蘭語の号令が用いられていた。

意を、着け(げえふと、あくと) Geef acht
 頭首を=右へ(ほふふど=レクツ) Hoofd=regts
 右方へ=転向(れくつ=オム) Regts=om
 右転=背面向(れくつおむ=ケールト) Regts=om=keert
 休息(リュスト) Rust
 肩前へ=銃(をつぶ、すこうどる=ヘット、ゲウェール)
 Op schouder=het geweer
 銃鎗=嵌節(ばよねつと=オップ) Bajonet=op

他方、安政2~4(1855~57)年に長崎における海軍伝習が実施されると、幕府の鉄砲方や浦賀奉行所の与力・同心、江川代官組の手代・手付らが伝習生として派遣され、雷管式のゲベルに対応するオランダ海兵隊の教練を受けた。この伝習を経て、講武所では新たな教練書の編纂が行われ、安政4年に『生兵教練』『小隊教練』『大隊教練』『生兵 小隊 大隊 教練附録 附補正』が刊行された。これらのうち、『生兵』は1848年版のオランダ海兵隊執銃教範、『小隊・大隊』は1851年版オランダ歩兵教練書、『附録・補正』は1855~56年版オランダ歩兵教練書を翻訳したものであった。

翻訳を担当したのは砲術師範役となっていた江川英敏の門人や家臣であったと考えられ、先代の江川英龍が考案した日本語の号令

が書中に取り入れられた。ここにおいて「『銃』を『ジュー』と呼ばずして『ツ>』なる歯切音を用ひ、『剣』を『ツルギ』将た『ト>』(刀)、『カタナ』と呼ばずして『ケン』なる鋭音を用ひ」といった(矢田七太郎『幕末の偉人 江川坦庵』高山堂、1908年)、今日に連なる兵式号令の原型が示されることとなった。

気ヲ着ケ

頭=右

右=向ケ(「右向ケ=右」となるのは明治2年以降)

右向=廻レ(「回レ=右」となるのは明治2年以降)

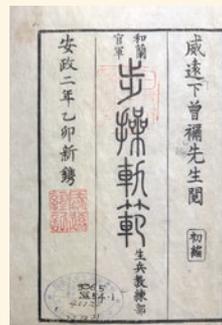
休メ

筒=肩(『生兵教練附録』で「肩へ=手銃」に改正)

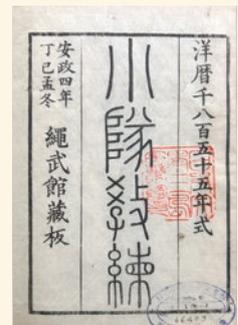
剣=附ケ

同時に江川家の支配であった芝新銭座の縄武館では、1855~56年版オランダ歩兵教練書の翻訳を進め、安政4年に『歩兵運動軌範』として刊行した。ここにいう縄武館とは、江川英龍の没後、幕府が江川家に提供した浜御殿に隣接する8000坪余の敷地に建設された兵学塾で、「御代官御鉄砲方兼帯」の役職を引き継いだ江川英敏が運営にあっていた。『歩兵運動軌範』の原書は*Reglement op de exercitien en manoeuvres der infanterie* (Breda : Koninklijke akademie voor de zee-en landmagt, 1855-56)で、翻訳にあたったのは、嘉永6年に江川家に召し抱えられて「御鉄砲方附手代示方兼蘭書翻訳方」となっていた石井脩三である。

もともと同書は、第一篇「歩卒学校(Soldatenschool)」・第二篇「小隊学校(Pelotonsschool)」・第三篇「大隊学校(Bataillonsschool)」・第四篇「聯隊学校(Linieschool)」から構成されるものだったといわれるが、第一篇と第四篇は未刊との説もある。書中に示された「号令詞」は前記した講武所版教練書とほぼ同一であり、縄武館に在った江川家の門人や家臣により、江川英龍が葦山塾における調練で試行した日本語の号令が広められることとなった。



▲ 牧天穆 訳
 『和蘭官軍 歩操軌範』
 (山城屋佐兵衛 1855年)



▲ 石井脩三 訳
 『歩兵運動軌範』
 (縄武館 1857年)



エネルギーをめぐる旅 文明の歴史と私たちの未来

古舘 恒介 著 [英治出版]

国際総合政策学科 教授 小早川 徹

なぜ私たちはエネルギーを大量に消費する世界に生きているのか。本書は、この深淵なる問いに正面から答えようとする。エネルギーを扱う書籍の多くは工学系であり、さまざまな技術の説明に終始するものが少なくない。しかし本書は、人類が今直面する気候変動問題の背後にある「エネルギーの問題」について、なぜその消費量が拡大の一途をたどるのかを、五つの技術革新に焦点を当てて紐解いていく。

一つ目の革命は「火の利用」、二つ目が「農耕の開始」、そして「産業革命」「電気の利用」「人工肥料の開発」と続く。人類の発展に大きく貢献した技術との関わりにおいて、エネルギー消費が増大していく過程を描く本書の展開は見事である。著者曰く、「ヒトは火を使って調理することを発明したおかげで脳を肥大化させることができた。私たちの脳は、その本質として飽くなき

エネルギー消費への欲求を抱えている。」やや直観的な説明ではあるが、妙に説得力がある。

著者の古舘氏は、大学の理工学部を卒業後、エネルギー企業に勤める理系人材であり、サラリーマンとして働きながら本書を書き上げた。特に驚かされるのは、その歴史や宗教などに関する博識であり、これら幅広い話題と絡めながら、人類とエネルギーとの関わりを論じていく点である。理工系の視点からも、熱力学やエネルギー関連技術について平易な説明を試みており、一人の人間が書いたとは思えないほどの広がりを見せる。時に理性的に、時に情熱的に、エネルギー問題の核心に迫っていく。

エネルギー消費と人類進化の過程、そして現代を生きる私たちの時間利用との関係など——。本書を読むことで、まさに「エネルギーをめぐる旅」を体験できるだろう。



アメリカの新右翼 トランプを生み出した思想家たち

井上 弘貴 著 [新潮社]

国際教養学科 教授 松本 佐保

日本人にとっての米国は憧れの国でそのリベラルな価値観のお手本だった。しかしトランプ出現以降、特に現トランプ政権ではかつての価値観が後退し、保守的で右派的な考え方が支配的だ。

本書はそうした現象がなぜ米国で起きたのか、その保守や右翼も一枚岩でないことを解説している。トランプは伝統的な保守や右翼ではなく、むしろ伝統的保守をぶっ壊そうとするトランプ思想を解明する。関税で日本を悩ませ、日米同盟も壊しかねない態度、言うほど反中国でも反ロシアでも反北朝鮮でもない、日本人には心配要素が多い。世界を巻き込む騒がせ大統領やその側近、イーロンマスクやピーター・ティール、IT業界のドン、テック・マフィア達の頭の中、その保守や右翼思想って何だろう、皆知りたいのである。

米国の保守思想を建国時に遡ってトランプ思想の背景を説明し、大戦期のニューディール政策(大きな政府、福祉重視政策)と戦後のその継承への反発から生まれた戦後の保守主義を説明、ヒッピーによるベトナム反戦運動やウッドストック音楽祭、性の解放と麻薬使用、これに強く反発したキリスト教団体を含む

社会保守の台頭だ。反戦運動の担い手は大学生でエリート層、反エリートの草の根的な社会保守運動を組織するのは高卒のブルーカラーだ。2010年～2020年代の親トランプの新右翼の台頭、反グローバル主義に加え以前は傍流だった白人至上主義やディープ・ステイトなどの陰謀論を信じる人達が参加、トランプの熱狂的な支持者として共和党政権内に一部入り込んでいく。

ディープ・ステイトや陰謀論など冗談に聞こえるが、他人事ではない。先の参議院選挙で議席を増やした参政党、アメリカファーストを真似たジャパン・ファースト、日本でも少子化に伴う人手不足で移民が増える中、日本人優先の何が問題なのと思う人もいるだろう。参政党の移民政策に違和感なくとも、問題なのは同党支持者のコアの人達にはディープ・ステイトを信じる人達が一定数いる。コロナや麻疹のワクチンに反対し、秘密裏に社会を動かす「影の政府」の存在を信じ、宗教的な支持層はキリスト教福音派やカトリック保守ならぬ、カルト系宗教団体の存在が取り沙汰される。



言い間違いはどうして起こる?

寺尾 康 著 [岩波書店]

国際教養学科 准教授 笹生 美貴子

「言い間違い」はどのように起こるのでしょうか。本書は、言語学の立場から、そのメカニズムを解明しようとして試みている点が大きな特色です。言い間違いは、発話に至るまでの過程で「脳/心が行っている作業の様子を伝えてくれる貴重なデータ」(10～11頁)でもあります。

本書の構成は、第1章「昭和五十九年、大晦日の「事件」——プロローグ」、第2章「「本物」の言い間違いをみつける」、第3章「コワレてわかる言葉の部品」、第4章「間違いを言わせた犯人」、第5章「「エジプトにのぼる」?」、第6章「「あやむや」になった指定席」、第7章「「ジャカン・カップ」の獲得者」、第8章「忍び寄る「人さがわせなうらない」」、第9章「言い間違いはどうして起こる?」、第10章「言い間違いの人も、許すの人も一

—エピソード」です。

特に興味深いのは、「混成型言い間違い」(91頁、第6章)について言及されているところです。「混成」とは、語と語が混ざることによって別の語が生み出されることです。本書では、「混成」から、商品名やキャラクター名が創り出されている(「カルピス」(カルシウム+サルピス)、「ゴジラ」(ゴリラ+クジラ)など)ことにもふれながら、混成により起こる言い間違いについて分析されています。「おてつかい」(おてつだい/おつかい)や「あやむや」(あやふや+うやむや)などです。

言い間違いをする時、私たちの頭の中で何が起きているのかを教えてくれる読み応えのある本でもあります。



コーヒーと内戦 エルサルバドル ヒル家三代の物語

川島 良彰・山下 加夏 著 [平凡社]

国際総合政策学科 教授 藤城 一雄

「コーヒーと内戦」という書籍名からは、どのような内容の本なのか、難しい本と身構えてしまうかもしれない。日本に住む私たちが当たり前のように日々消費しているコーヒーの生産地、コーヒー生産者について、私たちはどれだけ知っているだろうか。遠い地球の裏側の国々で、会ったことのない人々によりコーヒーは生産されている。そして、中米エルサルバドルの内戦について、知っている日本人がどれだけのいるだろうか。

物語は、英国で生まれたジェームス・ヒルの生い立ちから始まり、孫のロベルトのアフリカ冒険記、ひ孫のディエゴのレインフォレスト・アライアンス認証へと語り継がれていく。ヒル家は、エルサルバドルコーヒー産業の礎を築き、今は持続可能なコーヒー産業をけん引している。これまでに語られてきたエルサルバドルの歴史では、富裕層のコーヒー農家による寡頭支配が、国内格差を生み、内戦を引き起こした諸悪の根源とされてきたが、丁寧な文献調査

や関係者へのインタビューから、労働者を守り大切にしながら成長していったヒル家のストーリーを紡ぎ出していく。

著者の一人のコーヒーハンター川島氏は、静岡県出身。1975年、高校卒業直後、コーヒー留学のために単身エルサルバドルに渡航。その年は、エルサルバドルコーヒー栄光の年だったが、1980年から1992年までの内戦に向かってエルサルバドルは不安定さを高めていく。川島氏自身も恩人の暗殺や友人の行方不明などを経験するなど、エルサルバドルを生きた肌感覚から描く物語は、本書の説得力を増している。

分断と対立が深まる現在の世界の情勢をどのように理解していくのか、その中で我々はどう生きていくのかの示唆を与えてくれる一冊となっている。勿論、コーヒー好きには、コーヒー産業の歴史や、裏側を知れる貴重な情報が満載されており、読後はコーヒーの味わいも変わってくるのではないだろうか。



読書を最高のエンターテインメントに 本が大好きになる図書館の使い方

つのだ 由美こ 著 [秀和システム]

食料栄養学科 准教授 篠原 啓子

皆さんに紹介する本は、たまたま新聞の書評欄に掲載されていて、新図書館がこれから利用できるのを読んでみようと思った本です。著者はフリーランスの大学図書館司書として、さまざまな分野の先生方の研究の情報提供に関わり、学生たちに図書館の使い方を教えることに定評がある方です。

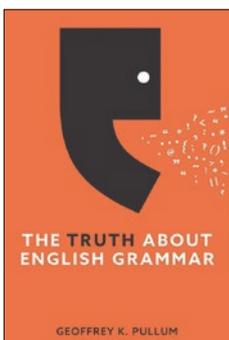
本の内容は、図書館や司書がでてくる38本の映画を紹介しています。私は、WOWOWで映画を録画して余裕がある週末には3本くらい一気見します。本で紹介されていた映画の半分くらいは見ていました。筋書きがざらっと紹介されているので「そういえばそんな場面があったな」と思い出しながら楽しく読めました。

しかしなにより興味深かったのは、映画の内容と図書館を絡めて「図書館あるある」や個々の映画の製作には図書館で得られる情報がすごく利用されているということを紹介している点です。例えば、幽霊がでる図書館、図書館とスパイ、宝探しと図書館など意外な関係性がわかって、図書館はただ必要な

本を借りてくる場所という私の意識は変わりました。本を読むのは苦手だけど、映画を見るのは好きという人には面白い本だと思います。

また、著者は「世界一かんたんな図書館の使い方」という本も書いています。私はアナログ人間なので書籍が基本。何か構想を練る時にはよく図書館を利用します。図書館に行くタイトルがずらっと並んでますから、関係しそうなブースを斜めに見ながら発想を得るんです。そして気になる本を読めもしないのに借りてきて何回も期限を延長しながら、最終的に必要な本を数冊買う。本が好きで読んだり、調べたりという作業は苦になりませんが、この本を読んだら、司書さんに声をかけて調べてもらって本を選ぶ方がもっと効率が良いことがわかりました。レポートや課題をまとめるのに苦労している人にはこちらもお勧めです。

図書館には意外な発見があります。スマホで探すよりもっと知識が広がると思いますよ。



The Truth about English Grammar

Geoffrey K. Pullum 著 [Polity Press]

ビジネス教養学科 専任講師 S.ドレイジ

This short book by renowned linguist Geoffrey Pullum lays out some of the basic principles of English grammar in a consistent and modern way. In effect, what it offers is a distillation of English grammar as presented in Pullum's earlier work: the multi-authored *A Student's Introduction to English Grammar* (2nd edition, CUP, 2022) and *The Cambridge Grammar of the English Language* (CUP, 2002). The latter is a modern reference grammar that clocks in at a massive 1862 pages. It can be tough going. *The Truth about English Grammar*, in contrast, is easy to read and easy to understand. It even has a few jokes. It can be tackled by students who have a good intermediate level of English. English language teachers should also read it. In fact, for students and teachers or anyone who has suffered and struggled with English grammar as traditionally understood, the book will be a revelation.

STUDENT'S VOICE

図書館移転体験記

～重い本、重い歴史

私たちが運んだ「図書館」の重み～

国際教養学科
3年 林 隼士

図書館の移転作業にアルバイトとして参加させていただき、貴重な経験をすることができました。担当した作業は、本の汚れやほこりを丁寧に清掃することに加え、書庫整理では、本のラベルが剥がれていたり文字が薄くなっているものを修復し、本の順番を確認しながら正しい配置に戻す作業です。また、本が入ったダンボールを運ぶ作業にも携わりました。実際に作業をしてみて、図書館に所蔵されている本の多さに改めて驚かされました。体力を要する作業が続き大変な場面もありましたが、職員の方々からお菓子や飲み物をいただき英気を養い、やりがいを感じながら作業に取り組むことができました。普段は見ることのできない図書館の裏側に関わったことは、大変貴重な経験となりました。

国際教養学科
3年 山口 寛人

図書館の移転作業で私は、本の掃除や並び替え、ラベルチェック、運び出しなど、さまざまな作業に携わりました。これらの作業を行う中で、数えきれない蔵書や資料が図書館に存在し、それらを正確に管理することの大変さを実感しました。途方もなく骨の折れる作業ではあったものの、同じアルバイトの仲間や職員の方々とは協力しながら作業を経験することで、図書館を支える仕事への理解が深まりました。そして何より、図書館を利用する1人の学生として、移転という特別で大きなプロジェクトに関わることができたことを光栄に感じています。移転後の新しい図書館を利用する日が待ち遠しいです。

国際教養学科
3年 安永 智裕

学生アルバイトとして今回の引越し業務に参加しました。主に行った業務は本へのタグ入れと本を運ぶことであり、タグ入れの作業中には、思いもよらなかった内容の本や古い資料に出会うことができ、意外に面白いと感じる場面が多々ありました。また、運搬の大変さから、これまで図書館にどれだけ多くの本があったのかを実感し、本がどのように分類され、並べられているのかも学ぶことができました。今回の体験から図書館が円滑に機能するための工夫を知り、大変でしたが、とても貴重な経験になりました。

国際総合政策学科
3年 森下 雄祐

私は2025年春より、図書館の移転作業に携わってきました。作業内容は時期によって異なり、前期は書庫での本の清掃やICタグの貼付、後期は新図書館へ移す本の梱包や移動を主に担当しました。力仕事に苦勞することもありましたが、職員の方々には皆優しく、学業とも両立しやすい、非常に恵まれた環境でした。また、作業を通して、未知の分野の本や、自分よりはるかに大先輩といえるほど古い本とも出会い、新たな視点や紙の本ならではの魅力に気づく貴重な機会となりました。入学以来、多くの時間を過ごしてきた現図書館の閉館は名残惜しいですが、その歴史の最後と、新図書館の最初の1ページに立ち会えたことを、今では少し誇りに思います。

国際機関資料室から

INTERNATIONAL DOCUMENTATION CENTER



日・EUフレンドシップウィーク2025「シヨパンと巡るポーランド」開催

EU情報センターを併設している国際機関資料室では、毎年5月9日のヨーロッパ・デーを記念して、日本とEUの交流を目的とするイベント「日・EUフレンドシップウィーク」を開催しています。

今年度は、5月9日(金)から9月30日(火)まで、図書館1階閲覧室にて、「シヨパンと巡るポーランド」と題した展示会を実施しました。2025年前半、ポーランドが欧州連合理事会の議長国を務めたことから、ポーランドに焦点を当て、シヨパンの生涯や音楽を通じて、同国の歴史、文化、観光名所などを紹介しました。

恒例のクイズでは、展示を見れば答えられる内容とし、欧州連合代表部から提供されたノートやエコバッグなどのEUグッズを景品として用意しました。

2004年のEU加盟から、経済成長を続けているポーランドですが、一方で強制収容所等の重く暗いイメージも根強く残っています。そこで今回は、学生が少しでもポーランドに興味を持てるよう明るく

親しみやすい展示を心がけました。

本展示が、EU加盟国やヨーロッパへの関心を高めるきっかけになれば幸いです。



図書館ニュース

BIBLIOTHECA

第21号

通巻第166号

発行日/2026年2月28日

編集・発行/日本大学国際関係学部
図書委員会<https://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/>